

ADLの向上を目指すために 清潔を保つことに着目して

18CC05 NGUYEN THI ANH NGA

I. はじめに

「介護老人保健施設は、病院と施設、あるいは病院と在宅の中間施設というサービスで、短期入所療養介護、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションが併設されている（中略）①リハビリテーションを提供することで機能維持・機能回復をになう施設、②在宅復帰支援と在宅療養支援のための地域の拠点となる施設と介護老人保健法の中で定義されている」¹⁾。

介護実習Ⅲでは、入浴と歯磨きについて介護計画を実施した。そこから、利用者との関わり方や利用者に合わせて介助の難しさを学んだため報告する。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人保健福祉施設

2019年6月24日～7月22日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 90歳代 女性、穏やかな性格

主な疾患は鉄欠乏性貧血、慢性心不全

筋力低下があり、車椅子で移動、車椅子の自走、手すりを持つての立ち上がり可能

入浴は週二回、個浴（部分介助）、脱ぐことは自分できるけど疲労防止の為着衣は全介助

自分で歯ブラシを使い洗浄を行う（義歯使用）が、声をかけないと忘れてしまう

居室の洗面所の高さが低く車椅子があたってしまうため、ななめにして歯磨きを行う。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

1) お風呂が好きじゃない理由は「着脱はめんどくさい」と入浴後疲れがある

→お風呂に入らないことが続くことで清潔が保てなくなりADLの低下、自信のなさ、生活の不活発さにつながることを予測される。

2) 歯磨きの確認をすると「忘れていた」と思い出し、洗面所に向かう。歯磨きは居室の洗面所で行う。

→歯磨きをしないことが続くと口臭、虫歯や咀嚼力の低下、誤嚥性肺炎など健康状態の悪化につながることを予測される。

2. 介護上の課題

1) 入浴日に入浴をしてADLの低下を防ぐ必要がある

2) 食事後に歯磨きをして口腔の清潔を保つ必要がある

3. 介護目標

長期目標：自分らしいQOLの向上を目指すことができる

- 短期目標：1) 入浴することで全身の清潔を保ちリラックスすることができる
2) 恥ずかしくなく安心して歯磨きをすることができる

V. 実施及び結果

- 1) 入浴中「お風呂が好きですか？」と言うと「あまり好きじゃない」と答えた。入浴後、「お風呂がよかった」と笑顔がみられた。実施中は入浴の拒否はなかった。
→入りたくないとおっしゃる日もあったが着脱の介助をすれば入浴してもよいとのこと。入浴後は「良かった」という発言もあるため引き続き実施する。
- 2) 声をかければA様は自分で歯磨き、義歯の洗浄ができた。歯磨き後歯がきれい磨けたことを伝えると笑顔がみられた。終了後には疲労感が見られていたが丁寧に磨くためには引き続き声掛けが必要であると考えた。
→拒否はなかったため続けて行うことにより習慣となり自分で行えるのではないかと考えた。

VI. 考察

介護実習Ⅲで関わらせていただいたA様の支援を通して、ADLの向上を清潔を保つという視点から振り返っていく。

「お風呂に入らない」との返事があれば、いったん引き下がります。ほかの話題に変えたり、ほかに楽しいことをしたり、食べたり飲んだりして、数分したら再び誘います²⁾。利用者が入浴を拒否している場合は、介助者が入浴の誘い方を工夫する必要がある。気持ちが変われば主体的に入浴することができ、体も動きやすくなるのではないかと考えた。また疲れやすさも変わってくるのではないかと考えた。

歯をみがきの動作は、上下の歯、前歯と奥歯といった歯の位置に合わせて歯ブラシを当てることができるか、みがく力は適切かどうか評価のポイントです。みがく力が弱い場合は、補助的手段として電動歯ブラシを使用することもあります³⁾。

利用者に疲労感がある場合は、介助者が一つずつ簡単な動作を教えることが大切だと学んだ。

VII. おわりに

利用者との関わり方の大切さを改めて学ぶことができた。また、利用者のできる範囲が広がったと思う。利用者はこういう方だから、こうやってきたから、と決め付けるのではなく、利用者のできることは活動として行うことも必要だと考えられる。今回の学びを介護の現場で活かしていきたい。

参考・引用文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会 (2019) 「最新 介護福祉士養成講座 10 介護総合演習・介護実習」中央法規出版 p. 121
- 2) 伊莉弘之 (2009) 「認知症ケア食べに入浴しない眠らないへのアプローチ」日総研出版 p. 89
- 3) 壺岐英正編集 (2017) 「ADLの評価&向上サクセスガイド」メディカ出版 p. 46